

ることに結びついた。

3) 浄瑠璃『弱法師』

「諸人におもてをさらす」

1694年の浄瑠璃『弱法師』では、俊徳丸は家臣仲光の家を、経済的負担をかけることへの遠慮と、天王寺で業をさらすために出奔する。

「其上かやうのみれいしや（「癩」病人）の、諸人におもてをさらしぬれば、必ほんぷくするとき、命おしきにあらね共、何とぞ二たび世に出て、かれらがおんをもほうぜん」という俊徳丸の台詞では、「諸人におもてをさらす」、つまり業をさらすことが、天王寺での乞食行為の本質となっている。

仏教の本来の考え方に基つけば、乞食をするのは自分にとっては、解脱への修行行為であり、施与する人のためには、「福田」となる。「癩者」が人目の多いところで、物乞いをしながら自分の病気を人目にさらし、病気の治癒を願うのは、仏教本来の乞食行の主旨とは異なる、日本的な発想である。

業をさらせば病が治癒するという考え方は、同じ近松作の1693年上演、浄瑠璃『せみ丸』にも描かれる。中世では蟬丸は、業をさらすために逢坂山に捨てられたのではない。中世の謡曲『蟬丸』（世阿弥作か）を見てみよう。

次の台詞は、父延喜帝によって逢坂山に捨てられた蟬丸のものである。

「もとより盲目の身と生まるる事、前世の戒行拙きゆゑなり。されば父帝も山野に捨てさせ給ふ事、御情けなきには似たれども、この世にて過去の業障を果し、後の世を助けんとの御はかりこと、これこそ真の親の慈悲よ」

彼の身体障害の原因が、前世での行いに対する報いと考えられていたこと、だからこそ父帝は、逢坂山で乞食をして罪障を果たし、後世での幸せを願えという意図で、蟬丸を捨てたのだと理解される。逢坂山で乞食をする目的は、業をさらして現世での眼疾の治癒を願うことではない。

このあと蟬丸は、同じように障害のために宮中を追われた姉・逆髪と巡り会って再会を喜び合うが、再び別れて一人で暮らし、盲目が治ることはない。

これに対して前掲の近松の『蟬丸』では、蟬丸は美男故に多くの女性の恨みをかって盲目となる。父帝は「此世にて諸人にはぢ（恥）をさんげ（懺悔）して、ごうしゃう（業障）をはたし、ごせ（後世）を助るいとなみ、相坂やま（逢坂山）に捨置べし」と、明らかに業をさらす意図の下、蟬丸を逢坂山に捨てさせる。中世の謡曲『蟬丸』と、元禄期の浄瑠璃『せみ丸』では、蟬丸の逢坂山での乞食行為の目的は、仏道修行から業をさらすことへと変化している。しかも近松の蟬丸は、逢坂山で目が見えるようになる。

江戸時代、蟬丸説話は業をさらして目が治る話として、広く知られるようになったらしく、後の『莠伶人吾妻雛形』や『摂州合邦辻』でも、俊徳丸が天王寺で乞食をするにあたって引き合いに出されることになる。